

# 話芸としての怪談の評価の試み ～怪談師が用いるこわがらせ方～ Evaluating Ghost Storytelling as a Narrative Art

石川 悟

Satoru Ishikawa

北星学園大学

Hokusei Gakuen University

ishi\_s@hokusei.ac.jp

## 概要

「怪談」の持つどのような話し方の特徴が「怖さ」を生むのか、怪談師はその特徴をどのように使い分けしているのか、オンライン上で公開されている怪談を評価した。その結果、声が大きく高くなる、あるいは声小さく低くなると、怖さのレベルが大きく評価される傾向が現れた。ただし、声の大きさを小さくしない怪談師も現れた。また、話す速度が速くなり間が長くなるときの怪談の怖さのレベルが大きく評価される傾向が現れた。

キーワード: 怪談, 話芸, 怖さ (ghost story, narrative art, scary feeling)

## 1. はじめに

話芸である漫才や落語について、演者が示すリズムや間の使い方等、多方面から研究が進められている[1][2][3][4]。怪談も話芸として楽しまれてきたものであるが、近年オンライン上で「怪談師」と呼ばれる方々が活躍し、2018年からは「怪談最恐戦」というイベントも開かれるようになった。また「怪談」とは、単なる怖い話を指すのではなく、「普段は見えず、意識もしないが、ある(起こる)と感じられる、特定の怪異な存在や出来事と想像する話[5]」のように、幅広い内容が含まれる。

本研究では、「怪談」の持つ話芸としての側面に着目し、どのような話し方の特徴が「怖さ」を生むのか、怪談師はその特徴をどのように使い分け、自身のものとしているのか、怪談師がオンライン上で公開している怪談を対象として評価し、検討することを試みた。

## 2. 方法

**評価者** 1人の評価者(執筆者とは異なる)がYouTubeチャンネルを聴取し評価した。評価者は、家族でホラー映画等に親しみ、日常的にもYouTube等で「怪談」を好んで視聴しており、怪談で用いられる「語り」の手法を一定程度評価出来ると判断できた。

**材料** 「怪談・都市伝説・人怖【OKOWA チャンネル】」、「Channel 恐怖」、「三木大雲チャンネル」、「日蓮宗公式チャンネル」、「竹書房ホラーチャンネル」、「匠平のやりたいことやるチャンネル」という6つのYouTubeチャンネルを用いて、深津さくら、田中俊行、三木大雲、中山功太、語り部・匠平の5名の怪談師が語る怪談作品から、動画の長さがほぼ同じで1人の怪談師が話している5篇を選定した(表1)。

表1. 評価に用いた怪談作品と動画時間

グループ	怪談師	怪談タイトル	時間
長編①	深津さくら	隙間から覗く者	10:05
	田中俊行	大穴のある家	10:03
	三木大雲	ホテルから金髪女性が…	10:52
	中山功太	有名廃病院へ侵入した女の末路…	9:59
	語り部・匠平	自害した彼女からの束縛	10:31
長編②	深津さくら	塩	11:19
	田中俊行	池に沈めた袋	10:14
	三木大雲	押すな	11:27
	中山功太	この世に幽霊は居ない…科学者がそう語る理由	10:08
	語り部・匠平	哀しい家	10:00
長編③	深津さくら	宮崎のマンション	9:52
	田中俊行	あの納屋に居た、少女…	10:02
	三木大雲	ダム	11:03
	中山功太	呪いのビデオ	10:07
	語り部・匠平	ユリおばさん	10:42
中編	深津さくら	現像した写真に映る女…その視線の謎とは	5:08
	田中俊行	そんなのあげちまえよ	5:37
	三木大雲	アフリカチャンネル	6:47
	中山功太	ほころの跡	6:06
	語り部・匠平	定番?	6:12
短編	深津さくら	電車の窓	2:12
	田中俊行	ローカルニュース	3:32
	三木大雲	幽霊子育て	5:36
	中山功太	人の命を司る…赤い男(短縮版)	5:05
	語り部・匠平	彼が激怒した理由…	3:47

単位: 分

**評価環境および方法** 評価者のiPhoneを用いて怪談作品の動画を再生し、怪談師の音声のみを聴取した。評価時にはタイマーと評価用紙を用意した。

評価作業では、怪談作品の「怖さのレベル」と「話芸の項目(声のトーン、声の大きさ、話す速度、間)」とを、それぞれ別に聴取し記録した。

まず怖さのレベルを測定するため、実験者が怪談を聴きながら感じた「怖さ」を0~5の6段階(数字が大きいほど怖さのレベルが高い)で評価した。記録は、そのとき評価者が感じている主観的な「怖さ」を、キ

表2. 評価項目と評価段階

評価項目	評価項目の分類	表記方法	
話芸	声のトーン	高い・普通・低い	ト高
	声の大きさ	大きい・普通・小さい	大大
	話す速度	速い・普通・遅い	速速
	間	長い・普通・短い	間長

一ボードの数字キーを押下し続けることによっておこなった。評価者は、怖さが変わった、と感じたとき、押下する数字のレベルを上げる・下げるにより、そのときに感じた「怖さ」を報告した。

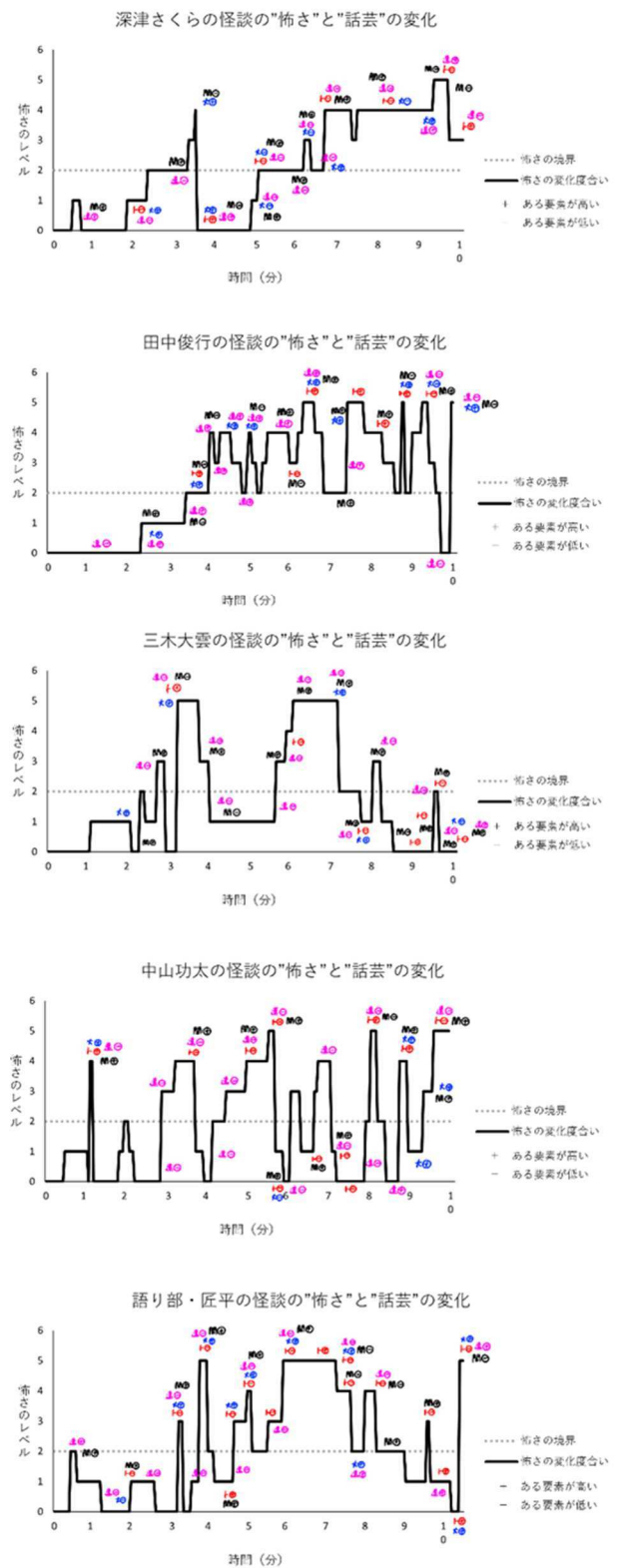
「怖さ」を記録後、改めて怪談を聴取し話芸の4項目を記録した。それぞれの評価項目のいずれも、怪談の最初の状態を「普通」の評価段階とし、それに比べて相対的に「高い/大きい/速い/長い」になった、あるいは「低い/小さい/遅い/短い」となったと判断された時点を、「怖さ」の程度を時間軸上に示した記録用紙に記入した。評価項目および段階を表2に示す。

### 3. 結果と考察

**怖さと話芸** それぞれの怪談師の動画に対する怖さと用いた話芸の時間的な推移を図1に示す。上から、深津さくら、田中俊行、三木大雲、中山功太、語り部・匠平の作品を評価したものである。

**話芸が生み出す怖さ評価** 図1のように得られた情報から、怪談師それぞれの特徴を見つけるため、まず、話芸の項目のそれぞれで「評価段階：高い/大きい/速い/長い」の評価を「+1」, 「評価段階：普通」の評価を「0」, 「評価段階：低い, 小さい, 遅い, 短い」を「-1」の重みを持つものとして数値化した。その上で、それぞれの「評価」が生じたときの「怖さのレベル」の大きさと掛け合わせた数値を、その「話芸の項目」が生んだ「怖さ」の大きさとした。例えば、「怖さのレベル：3」の時に「話す速度の評価段階：速い」と評価されていた場合は、その時点での怖さの程度を「3」とした。一方、「怖さのレベル：2」の時に「話す速度の評価段階：遅い」と評価された場合には、その時点での怖さの程度は「-2」とした。このように、それぞれの怪談作品ごとに重み付けた「話芸の項目の評価」を、「+：プラスの評価」と「-：マイナスの評価」ごとに分けて合計し、作品内で生じた回数で割って平均化した数値を、評価した話芸が産み出す「怖さ」の評価：「産出怖さ評価」とした。

図1. 怖さと話芸評価項目の推移



それぞれの怪談作品ごとに、「評価段階：高い/大きい/速い/長い」のそれぞれについて、「+」と「-」の計8種類の「産出怖さ評価」を表す数値を求めた後、「声のトーン×声の大きさ」, 「話す速度×間」を「+」

と「一」を別々に組み合わせ、合計4つの組み合わせを準備した。この4つの「産出怖さ評価」の組み合わせを、怪談師ごとに評価した5つの作品をまとめて散布図として示したものが図2である。図2の左側の「声のトーン×声の大きさ」を示す散布図では、横軸に声のトーン、縦軸に声の大きさを示した。図2の右側の「話す速度×間」を示す散布図では、横軸に話す速度を、縦軸に間を示している。

図2では、上から深津さくら、田中俊行、三木大雲、中山功太、語り部・匠平、の各怪談師の結果を示した。どの怪談師でも、ほとんどの作品の「産出怖さ評価」は第1象限と第3象限にはプロットされた。「声のトーン×声の大きさ」においては、声が大きく高くなる場所では怖さのレベルが上がる、と評価され、声が小さく低くなる場所でもまた怖さのレベルが上がる評価されたことになる。「話す速度×間」においても、話す速度が速くなり間が長くなるのが怪談の怖さのレベルが上がると評価される傾向が見られた。

ところが、第3象限に「産出怖さ評価」がプロットされない怪談師も現れた。特に、図2の左側：「声のトーン×声の大きさ」において、声のトーンを低くすることはあっても声を小さくすることがない怪談師（三木大雲／中山功太／語り部・匠平）もいた。

#### 4. 考察

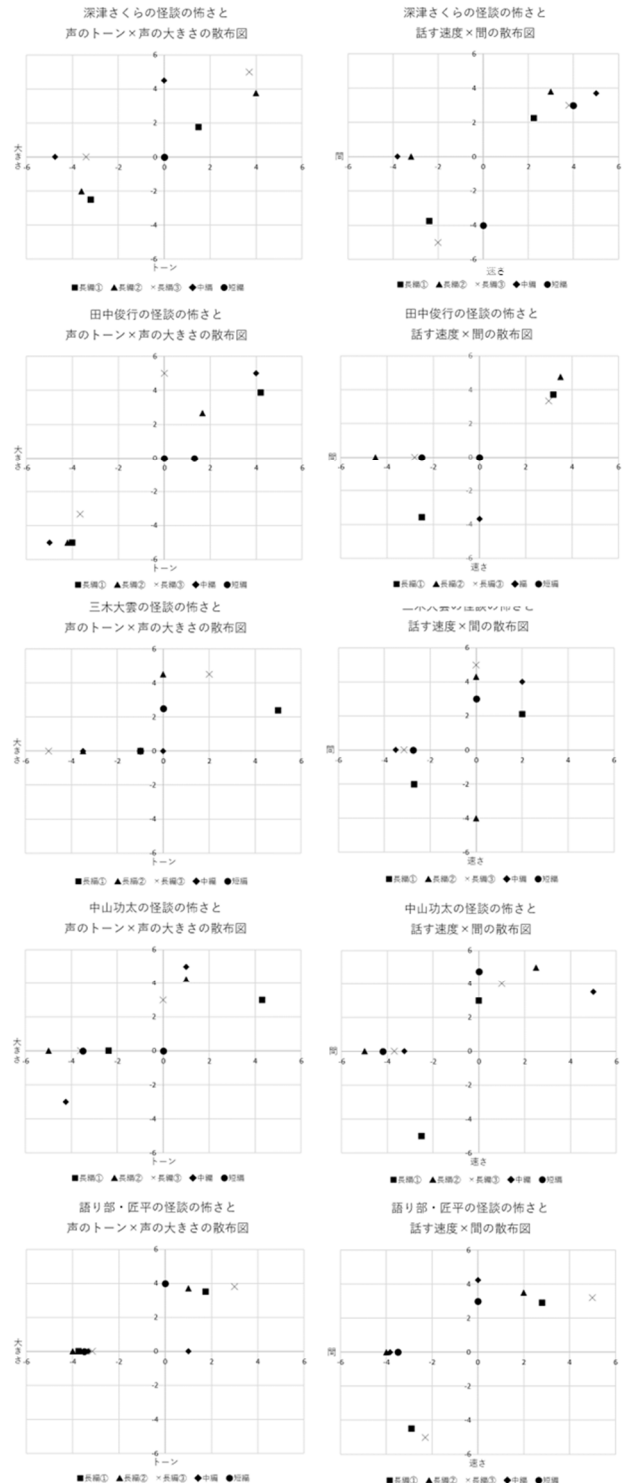
以上、怪談師が話芸である怪談作品を演ずるとき、どの怪談師も「怖さ」を生むために同じような手法を用いていることを示唆する結果が得られた。一方で、それぞれの怪談師の語りに現れる特徴を評価するために効果的な指標についての手ごかりは十分に得られなかった。また、「話す速度×間」の「産出怖さ評価」においては、長編作品においてのみ「間」の長短を効果的に使い分け「怖さ」を産出させている可能性が確認できた。このことは、「怖さ」を大きくするためには怪談作品に一定程度の長さが必要であることを示唆する。

今後、複数の評価者によって「怖さのレベル」および「話芸の項目」を評価させたとき、この結果が一致するかどうか確かめ、今回用いた評価方法の妥当性について改めて検討することが必要である。

#### 5. 謝辞

本研究は、本学在学学生 多羽田成美 さんの多大な貢献によって実施されたものを再構成したものである。

図2. 怪談師別「産出怖さ評価」



#### 文献

- [1] 本井 佑衣・岡本 雅史 (2019) “漫才対話の「テンポの良さ」を支える発話リズムの同期・変調パターン”, 社会言語科学会第43回研究大会発表論文集.
- [2] 遠藤 謙一郎 (2015) “落語の「間(ま)」についての一考察”, 笑い学研究, 22, pp. 93-102.
- [3] 佐藤 建 (2010) “漫才の笑い：落語の笑い要素との関連において”, 笑い学研究, 17, pp. 83-90.

- [4] 川嶋 宏彰・Levi Scoggins・松山 隆司 (2007) “漫才の動的構造の分析-間の合った発話タイミング制御を目指して”, ヒューマンインタフェース学会論文誌, 9(3), pp. 379-390.
- [5] 鶴野 祐介 (2018) “シンポジウム 人はなぜ怖い話に魅かれるのか-語り手と聞き手の立場のからの問-”, 昔話研究と資料/昔話研究懇話会[編], 46, pp. 45-56.